

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### E. 学習・研究環境の改善

#### ②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

##### ●早稲田大学先進理工学研究科生命理工学専攻

##### 「超専攻型融合テーマスタディクラスター教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

積極的な海外派遣については、コアプログラムではなく、Problem/Project Based Learning (P2BL) やテーマスタディークラスター (TSC) 教育を補完し、学生の国際コミュニケーション能力向上のためのエクステンドプログラムと位置付けた。ただ単に国際学会や海外研究室に派遣、訪問、見学するだけでは、従来とあまり変わらないので、特に、海外の拠点大学との合同シンポジウムを開催し、学生の研究成果を他大学の教員学生の前で報告し、その中で国際性を養う努力をした。中国の上海交通大学とシンガポールの南洋理工大学とそれぞれ2回ずつ、ジョイントシンポジウムを計4回開催した。その場合のポスターのフォーマット、予稿集のフォーマット決定、編集などすべて先方の大学調整作業は、大学院生が中心に行い、学会を運営することのノウハウも学習できたと思う。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

学生は異分野の領域のみならず、それを英語を使って説明する必要もあったので、大学院生に自前の英語教育を提供することにし、サポートプログラムとして講義科目「生命理工学外国語講義 I~IV」および「PBL のための国際コミュニケーション」を設置し、外国人専任教員で、しかも医療・生命科学の専門領域の教員による国際コミュニケーション指導を行った。この科目の担当外国人教員は、上海交通大学および南洋理工大学とのジョイントシンポジウムにも出席し、学生のプレゼンテーションや議論の指導を行った。また、上記の機会以外に、発表の機会を得た大学院生に対しても、個別の指導を行ってもらった。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

直接的に学生のプレゼンテーション能力が向上している様子が、回を重ねるごとに見えるようにわかった。なお、英語が国語であるシンガポールにおいては、語学力に差が出るのは当然であるが、上海交通大学では、大学院生の英語能力が非常に高く、国際コミュニケーションのための英語を学ぶ意識が高まった。一方、相手側に与えた影響もあり、われわれの異分野融合教育について外国の立場から意見を聞くことができた。いずれの大学でも、先方は異分野融合教育に踏み切っておらず、従来型の専門分野の教育のみに頼っていたので、先方は、われわれの試みとその支援を国がしていることを評価し、絶賛してくれた。われわれはこれらのコメントに勇気づけられることとなった。